

## 第69回 埼玉県美術展覧会審査評

### 【第2部 洋画】

審査主任 きむら ひろし  
木村 浩

県展洋画部の出品点数は1,177点、そのうち入選513点（入選率43.6%）の厳選となりました。

審査員11名一同、個々の作品に対し、大いなる期待を込め審査に入りました。張り詰めた空気の中、第1審から第3審まで丁寧に公平に審査をしました。審査終盤には惜しくも入選を逃した作品を数度見直して、入選と予定されている作品との格差を無くすよう努めました。

出品作品の傾向として、堅実な描写が多かったですが、時代性を加味した深味の感じられる作品も増しており嬉しく感じました。なお、作品の中には色彩の鈍いものが少なからず有り、気になりました。

委嘱作家に限らず、惰性的なところが目につく作品も有りました。今一つの奮起を期待します。互いに更なる向上を目指して励んでいきたいものです。

#### ・埼玉県知事賞

「ききたい・くない」 しだ つばさ  
志田 翼

この作品は、パネルにしっかり地塗りを施したミクストメディア技法とされます。力強い筆致と赤と青の色彩対比が鮮烈で総合的に力強い表現となっています。

高校生が未来への挑戦など見つめつつ、生きる方向性を模索しながら現実を見つめている様です。また描写の丁寧な箇所と、少し荒々しい筆触の背景の組み合わせに新鮮さが感じられます。

・埼玉県議会議長賞

はちすは かわかつ きよみ  
「蓮葉」 川勝 清美

この作品は現代性を感じる描写であり、秀逸でありました。色と形が柔らかく一体化して広がりのある画面となっています。この作品の魅力は新鮮な輝く色彩にもあります。葉の間におかれた赤が効果的で、独特のこなれた青緑を引き立て、見る人に心地良い印象を与える作品になっています。作品の深まりは、ひたむきに対象に向きあう姿勢から生まれたものと強く感じました。

・埼玉県教育委員会教育長賞

「タイプライター」 ないとう かずたか  
内藤 和高

机の上には古いタイプライターが置かれています。よく見ると英文が途中まで打ち込んであります。

窓の外に広がる夜の風景は外国のものでしょうか。かすかに<sup>ともしび</sup>灯が見えます。室内と屋外の風景をうまく取り入れて物語を演出しています。

この作者は心の中に童話的な要素を持っているのでしょうか。大切にしたいと思います。構図が見事で赤い布が画面を引き立て、見る者を引きつける、色彩が美しく受賞に相応しい傑作です。

・埼玉県美術家協会賞

むぎ あらい ともえ  
「麦」 新井 友江

暗い壁際に置かれた麦と長方形の容器と三匹の蛾が上手く構成された作品です。色彩もよく、それぞれの表情が丹念に描かれてしっかりした構図の中に詩情豊かで好感を持てる作品になっています。今後も期待しております。

・埼玉県美術家協会賞

はる いだ よしこ  
「春」 井田 善子

顔の表情や曲線的に強調された体全体の形から作者の豊かな心情がよく伝わってきます。どっしりとした安定感のある構図と配色で若々しい春の息吹を表現している秀作です。白を中心とした配色に、青、赤、緑、黄が巧みに生かされ、清楚感のあふれる美しい作品です。

・埼玉県美術家協会賞

わたし じかん かわかみ きみこ  
「私の時間」 川上 君子

左手に缶ビールを持った赤いシャツを着た女性がじっとこちらを見つめています。赤いシャツは情熱を、強い輪郭線からは意志の強さが伝わってきます。

この絵は自画像でしょう。人は自分を直接見ることが出来ません。鏡に映る像は虚像であると同時に逆転の実像でもあります。

作者は鏡を通して自分と向き合いそして自分に語りかけてきます。お前は誰か、この作品からはそんな作者の真っ直ぐなメッセージが伝わってくるようです。実に力強い秀作です。

・埼玉県美術家協会賞

はるか みつのぶ ゆきえ  
「遥」 光信 幸恵

表現したいという思いが、素直に凝縮され、色彩も美しくまとめられています。そして、何よりもうれしいことに、本人の詩が聞こえてくることです。数少ない精神性を表現できている作品だと思われれます。

今後、どの様に展開して行くのかが、とても楽しみになる作家の一人だと思われれます。

・さいたま市長賞

「<sup>そうしゅう</sup>爽秋」 <sup>いのうえ</sup>井上 <sup>ゆうさく</sup>祐作

高原風景を背景にくつろぐ女性を愛情深く見つめ、丹念に描き込む作者の制作姿勢がよく伝わってきます。着衣等の材質感も適切に表現され存在感があります。また、顔の表情や人物全体の形を通して、作者のおだやかで豊かな心情がよく伝わってきます。優れた描写力を生かした秀作です。

・さいたま市議会議長賞

「<sup>ちゅうおうていしゃば</sup>中央停車場」 <sup>おうじ</sup>王子 <sup>めぐみ</sup>恵

この作品は、4枚のエッチングの作品を一つの額の中に収めるという見せ方の妙が魅力的です。

4枚の作品にそれぞれ副題が付いていて、一つ一つが別々の作品にも思える試みが好感を持ちました。

銅版画の技術も優れていて、長く経験を積んでいる作家であると思いました。これからも珠玉の様な作品の制作を続けていってください。

・さいたま市教育委員会教育長賞

「<sup>じょう</sup>ポンプ場 <sup>み</sup>の見える場所-Ⅲ」 <sup>みやち</sup>宮智 <sup>えいのすけ</sup>英之助

この作品はデジタルプリントによるもので、イメージが完成するまでに何度も試行錯誤を重ねた苦勞が感じられます。ポンプ場の見える場所に立ち、その光景の美しさを感じて制作されたのだと思います。ポンプ場に光が差し込み光と影のハーモニーが美しく表現されています。画面構成が巧みで作品が大きく感じられます。完成度の高い、感性豊かな作品になっています。

・朝日新聞社賞

「鮮緑」 せんりよく みやした なみな  
宮下 和皆

生い茂る樹木の一隅に着眼し、意図的に画面を明暗に分けた手法は、ねらいが明確で効果的です。木々の葉に差し込む光を上手に捉えられており、作者の制作意図が伝わってきます。水彩顔料の透明描法と強さを助長する不透明描法を使い分けて、力量のある筆力を存分に生かした良い作品です。背景と近景の暗部に空間感が出せるように工夫されると更に良くなると思います。

・NHK さいたま放送局賞

「ミュージアム」 ちば ゆりか  
千葉 由李華

機体、柱、床など急角度の斜線と面で構成された中に天井の曲線が心地良く、広い空間を描き出しました。作者は、その眼と心の中にデッサンの基本である水平と垂直の軸をしっかりと持っており、それを基準に動きのある画面を創り上げました。オレンジ色の主張を暖色のグラデーションがやわらげ、強い青は空間を引き締めます。説明的な描写も抑えられて、作者の意志が強く感じられる作品です。

・共同通信社賞

「トラクター」 おがわ きちのじょう  
小川 吉之丞

画面に大きく描かれたトラクター。長い間働いて、納屋の片隅におかれたのか、都市化の波で仕事を終えたのか。強い色で描きたいモチーフですが、色彩を抑えた中に、より作者の心を感じます。主張そして表現の深い作品です。

・埼玉新聞社賞

「バブバブの逆襲 ～ラブリエデストロイベイビー～」 <sup>うえむら</sup>植村 <sup>かのこ</sup>佳乃子

ひと目見て、斬新、古い言い方ですが「とんでいる、ぶっとんでいる」と思いました。高校生の描いた作品とは思えない技術があり、アイデア、構築力、色使い等とても優れていて好感の持てる作品になっていました。

額のまわりの手作りのコグマの飾りも効果的だと思いました。若さを十二分に発揮できていて、見応えのある作品に仕上がっていました。

ぜひ、これから先も絵画の世界から離れる事無くいつまでも描き続けてください。来年も楽しみにしています。

・産経新聞賞

<sup>みやび</sup>「雅」 <sup>せきの</sup>関野 <sup>えみこ</sup>恵美子

題名のとおり、「雅」という日本古来の美しさを表現したい作者の思いが伝わってくる作品です。その美しさを表現するための画面構成、モチーフの配置に作者の意図が感じられます。水彩画の透明感のある色使いにも成功しています。特に着物の柄の色彩は作品を引き立てていると思います。画面のマチエールに、もう一つ工夫があるとより強い作品になると思います。これからもっと期待できる作家です。

・テレビ埼玉賞

<sup>あさ</sup>「朝」 <sup>すずき</sup>鈴木 <sup>せいいち</sup>精一

走り寄って来た小牛が好奇に満ちた顔でこちらを見つめています。両耳をピンと立てこちらの出方を伺っているようです。

余分なものを取り除き小牛と大地だけで自分の世界を十分に表現しています。画面構成は小牛を画面のやや左側に寄せ上から俯瞰した構図となっていて小牛の上部を切り取りやや斜に小牛を置くことで、画面に躍動感と広がりを持たせています。

白と黒のコントラストが心地良く楽しい作品に仕上がっています。

・埼玉県美術家協会会長賞

たくじょう せいぶつ たきもと たかあき  
「卓上の静物」 滝本 高明

しっかりした構成で、空間のホワイト・グレーとテーブルの赤黒色とが画面を引き締めています。その中に静物が配置されていますが、それぞれの静物もよく観察され材質を感じさせるまで描き込まれています。しかし細か過ぎず大胆であり、それぞれが色彩的に響き合って美しいです。

更なる発展を期待しております。

・高田誠記念賞

せいぶつ いわき ひでお  
「静物」 岩木 秀雄

古典絵画を想わせる褐色調の重厚な画面でありながら、緻密であり、空間からは透明度を感じられます。一見穏やかな印象を受けますが、筆触には強い情熱が籠められています。古い物を照らす新鮮な光、よく澄んだ陰影、いま見つめている物の放つ気配。

受賞を機に、一層深まることと思います。